

農林水産大臣賞受賞

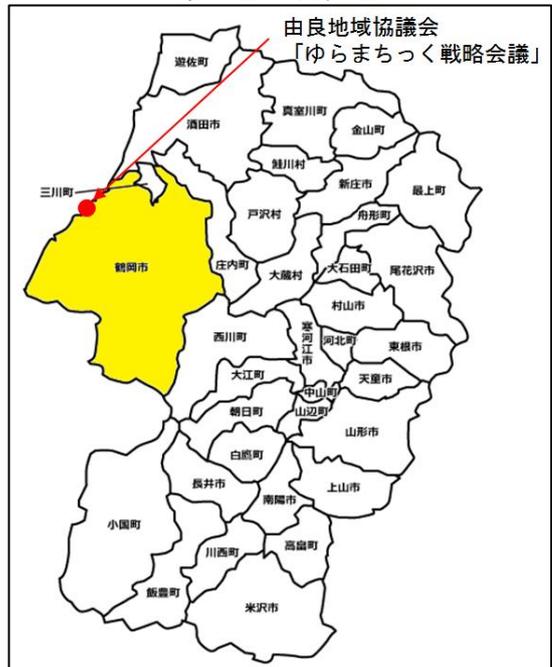
～再び訪れたいくなる、住みたいくなる、自慢したいくなる“ゆら”～

ゆらちいききょうぎかい
受賞者 由良地域協議会

せんりやくかいぎ
「ゆらまちっく戦略会議」

つるおかし
(山形県鶴岡市)

第1図 位置図



■ 地域の沿革と概要

鶴岡市は、山形県の庄内地方南部に位置し、平成17年の市町村合併により、人口約13万人となり山形県2位、面積は1,311.53km²となり東北地方では最も広く、全国でも7位となっている。

由良地区は、鶴岡市の海岸部に位置し人口1,034人、世帯数379世帯（平成30年12月末現在）の漁村地帯で、鶴岡駅及び庄内空港から自動車で25分、山形自動車道鶴岡インターチェンジから15分の場所に位置する。

北に“出羽富士”鳥海山、東に霊峰“出羽三山”（月山、湯殿山、羽黒山）を望み、“東北の江の島”とも称される白山島を擁し「日本の渚百選」と「快水浴場百選」に選ばれた由良海岸、蜂子皇子と八乙女伝説の奇岩・八乙女浦等、バリエーションに富む、恵まれた自然景観を有している。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

由良地区の主要産業は漁業であり、由良漁港（第2種漁港）では、タイ、ヒラメ、タラ、サケ、イワガキやアワビ等年間566t、322百万円の水揚げ

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落	
地区の性格	地縁的な集団等	
漁家率 (内訳) (H27)		7.6%
	総世帯数	355戸
	漁業世帯数	27戸
専兼別漁家数 (内訳) (H27)	専業	0戸
	兼業(漁業が主)	25戸
	兼業(漁業が従)	2戸
漁業の状況 (内訳) (H25)	漁業種類別	
	底曳網漁	314.0 t
	定置網漁	231.0 t
	採貝藻漁	15.6 t
	1経営体平均生産量	22.2 t

(平成 29 年) があり、漁獲量、生産額とも山形県全体の約 10%を占めている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

豊かな自然と人材、豊富な魚介類等の地域資源に恵まれた由良地区ではあるが、昭和 56 年には年間約 45 万人訪れていた行楽客や海水浴客が、レジャーの多様化等により平成 20 年度には 30 万人を下回り、その後も減少傾向が続いた。また、道路等のインフラ整備が進んだことで海水浴客が日帰りするようになり、約 80 軒あった民宿・旅館・ホテルが 10 軒にまで減少するとともに、漁協組合員の世帯についても、昭和 20 年代の約 7 割から、平成 20 年には 1 割弱にまで減少し漁業離れが顕在化していた。

一方、平成 13 年から 20 年にかけて、補助事業等による護岸等の整備事業が進められ、漁港の他に人工磯場、人工海浜及び多目的広場が整備され海岸の環境は大きく改善されてきた。また平成 19 年には、都市農村交流等の室内イベントを行うことができる多機能なコミュニティーセンターの建設にも着手され、むらづくりの拠点も整備されつつあった。

観光客の減少による地域経済の衰退や漁業就業者の減少等の課題を抱え活気を失っていた本地域にとって、整備された施設をどの様に活用し地域再生に繋げるかが喫緊の課題となっていた。



写真 1 由良地区

むらづくりについては、平成 19 年に地元漁業者等の若手有志で結成された「チーム TARA」が中心となり、恵まれた地域資源を地域の内外に広く伝えるべく動き出した。

その後、自治会や観光協会、漁業団体等に呼びかけ、都市住民との交流や魚食の普及、地域における漁村文化の継承等具体的な活動により、由良地区の活性化と新たな地域づくりを図るべく、目指す姿を「再び訪れたい、住みたい、自慢したい」の“ゆら”とし、平成 21 年 3 月に由良地域協議会「ゆらまちつく戦略会議」を設け、活動を本格化させた。

なお「ゆらまちつく」は、「生まれ育った子どもたちが地域の魅力を人に伝えられる。地域に人を迎えられ。地域で人が元気に暮らせる。」地域づくりのため、由良地区を“ロマンチックでドラマチックな場所”にしたいという思いを込め命名した。

(2) むらづくりの推進体制

組織体制は第1図のとおりであり、各構成員の役割分担は以下のとおりとしている。

- ア 由良自治会（事務局）
漁村文化・歴史文化伝承に関すること、協議会の全体調整と統括
- イ 由良温泉観光協会
ツーリズム、体験旅行受け入れに関すること
- ウ 山形県漁業協同組合
地元魚介類の活用策に関すること

※ 特に、漁協女性部由良支部の有志で結成した「ゆらまちっく海鮮レディース」は、魚食文化の伝承や商品開発、魚食普及を目的に機動的に活動している。

- エ 漁業団体（由良漁業者会）
漁業文化の伝承、魚食普及に関すること
- オ チーム TARA
情報発信、イベントや企画立案に関すること
- カ 鶴岡市（農林水産部農山漁村振興課）
市役所内及び他機関との連絡調整に関すること

また、山形県の「元気な地域づくり支援プロジェクト」平成30年度ケーススタディ採択を受け、自治会内に「活性化委員会」を設け、①漁村文化の伝承、②遊休施設解消の課題解消に向け、県と連携を図りながら取り組んだ。

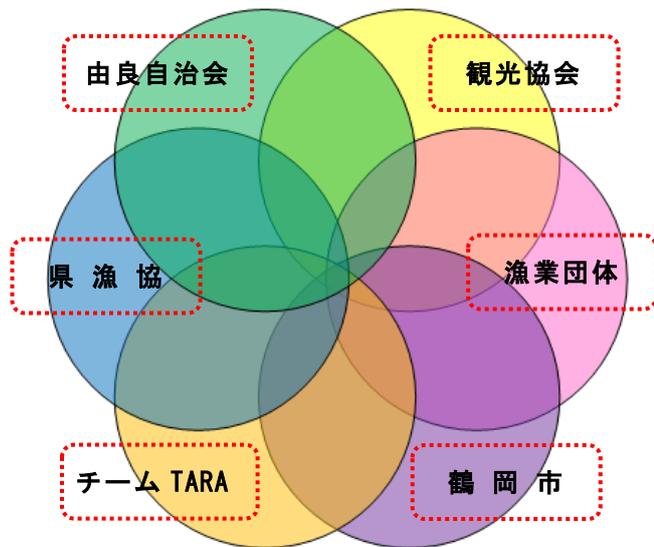
こうした「ゆらまちっく戦略会議」の取組は、県内外から視察や研修に訪れる等多方面から注目されている。また、ワークショップ出席依頼への対応や、県主催の「地域未来フォーラム」で事例発表を行う等、その取り組みを他地域に波及させている。

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

活動の成果として、体験型教育旅行のリピーターが増え、民宿利用客が増えたことが挙げられる。また、体験プログラムの運営にあたり、地域住民が指導者となるために人材の育成を進め、雇用の場が生まれ、漁村のあるべき姿を発信したことで新規漁業就業者が増え、また漁業体験等の実施により将来の漁業者の確保も期待されている。「小鯛だし」等の開発商品の販

第1図 『ゆらまちっく戦略会議』組織図



売により、女性の雇用の方・活動の方を提供することができ、また、新商品の開発に発展し水産加工品の可能性を広げたことにより、漁業者の更なる収入アップも期待されている。地域協議会が中心となり、地域住民と一緒に各種事業に取り組むことにより、地域の一体感が生まれている。

2. 漁業生産面等における特徴

(1) 漁業生産、流通面の取組状況

ア 魚食イベントの開催等

「由良港大漁祭」等の魚食イベントでの魚介類の販売、増加する宿泊客への魚介類の提供や地曳網等の漁業体験メニューの提供は、漁業者の所得向上に寄与している。

イ 水産加工品の開発・販売

市場性の低い小鯛や小型のタコにスポットをあて、昔ながらの由良のだし「小鯛だし」、小鯛だしを練り込んだ「八乙女うどん」や味付けして煮たタコを乾燥させた「おつまみ干しだこ」を開発・販売している。好調な売り上げにより水産加工による所得向上の可能性を見いだしている。



写真2 小鯛だし

ウ 水揚げされた魚のブランド化

これまで、東北地方で注目されてこなかった魚（トラフグ、マフグ等）やブランド化した庄内おぼこサワラを提供発信したことにより、鶴岡市内の料理店の他、山形市や仙台市にも販路を広げており、最近では豊洲市場への出荷も開始している。

エ 情報発信基地の運営

休業していた海洋釣堀を鶴岡市から借り受け、取り組みの情報発信基地として運営している。

釣堀には、由良漁港で水揚げされたギンザケやソイ、ヒラメ、アイナメなど約5千匹を放流しており、休日には入場待ちがでるほどの人気を博している。

オ 魚食文化の発信

冊子『魚図鑑と浜料理「浜のごつつお」』（2,000円）を発行し、魚の美味しさをPRしている。



写真3 発行した「浜のごつつお」

(2) 後継者の育成・確保と女性参画

ア 漁業の伝承

小中学生に対する漁業体験や、由良漁港で行われている11種類の漁法を伝えるDVDを市内の全小学校で教材として活用してもらうことで、漁業に対する関心を高めている。

イ 後継者の育成・確保

漁村が漁村であり続けるためには、漁業者の育成・新規参入が大きな課題であるが、これまでの活動により、他地域から1名の青年漁業者が移住した他、漁業体験を通じ、漁業を生業にしたいという高校生や移住希望の若者が現れている。

ウ 女性の参画

「ゆらまちっく海鮮レディース」は、「小鯛だし」等の加工商品開発の他、従来の漁協女性部活動を超え、自らが働く場の確保と新たな雇用の創出を目指し、白山島を眺められる「海テラスゆら磯の風」で、由良漁港で水揚げされた魚を調理・提供する取り組みを開始している。また、漁協女性部は、「ゆらまちっく戦略会議」の役員として会の運営に深く関わるとともに、女性部自身も各年代・各層が交流する体制を整えている。



写真4 DVDを鶴岡市に寄贈



写真5 ゆらまちっく海鮮レディース 魚食の普及活動

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 施設整備

漁港や漁業集落排水処理施設を整備する際、地元要望により、都市住民と交流を図るための人工磯場、公有水面埋立による多目的広場と駐車場の整備が行われ、地域住民の憩いの場となっている。

また、地域活動に関わる多くの組織が地域を元気にする活動の拠点として活用するため、休止していた旧フィッシングセンターに「海テラスゆら磯の風」を開設した。外部に設けた、海風を感じながら景色を楽しむテラスは、住民や行楽客に活用されている。



写真6 人工磯場

(2) 伝統文化の継承等

ア 祭の活性化

白山島の白山神社で豊漁を祈願し、神輿を担いで海を渡る「海中神輿」が行われていたが、漁業者の減少に伴い存続が難しい状況になっていた。地域住民が参加できるように豊漁祈願の子供用山車を活用するとともに、ホームページ等で祭をPRした結果、現在では漁師と地域住民を結びつける大きなイベントとなっている。



写真7 海中神輿

イ 伝説等の映像化

由良地域で古くから行われてきた神社やお寺の催事や、修験の山出羽三山の開祖とされる蜂子皇子にまつわる「八乙女伝説」、廃校になった由良小学校の思い出を映像化することによって、由良の伝統文化と思い出を次世代に継承する取り組みを行った。

ウ 都市住民との交流

由良漁港で水揚げされた新鮮な魚介類を即売する由良港大漁祭の開催や、幅広い年齢が楽しめる海鮮バーベキューを提供している。また、体験メニュー実施時の安全を確保するため、NEALリーダー及びL.S.F.A（救急救命士）の資格（現在10人が取得）を取得する等、受け入れ体制を整備した。体制整備後は、漁村における体験型学習、着地型観光として定置網船乗船、魚の調理体験等の体験メニューを提供し、平成24年に20人だったツーリズム人口が、平成26年に1,000人を超え、平成30年度は1,200人となった。



写真8 定置網体験

また、昭和女子大学と協働で魚を利用した商品開発や、外国人向けの旅行商品開発を行った他、イタリア食科学大学と連携し、漁業体験、市場見学、魚食料理体験を通し日本の漁村文化を世界に発信してもらうとともに、インバウンドの可能性を追及している。

エ 各種イベントの開催

海水浴シーズンを避けた時期にビーチサッカー大会を開催する等宿泊客増加に向けた取り組みのほか、観光客が極端に減少する冬季のイベントとして、由良ブランドの「由良鱈」を生かした「寒鱈祭」を開催する等通年観光を目指した取り組みを行っている。

(3) 環境保全活動

「はだしで歩ける由良海岸」を目指し、海岸に打ち上げられる海洋ポリを含めた大量のゴミの収集活動を実施している。

ゴミ収集についても、ゴミの種類によってポイントを競うイベント（スポーツゴミ拾い）や、企業と連携して行う等、交流人口の増加に結びつけている。

また、かつて由良のシンボル白山島を一面覆うように咲いていたイワユリの保護活動や、関係機関にも働きかけながら、島の景観を守る取組を行っている。



写真9 環境保全活動